



杉田健一さん
(NPO法人縁活 施設長)

滋賀県栗東市生まれ。短大では国文科を専攻するも、就職するにあたり、なんとなく福祉の仕事がしたいとの思いから、もみじあざみ寮（①）の見学に行き、事務員として入職。寮では、事務仕事の一方で、利用者と関わる場面も多々経験。後年、異動により現場の職員となり、また、他法人が運営するグループホーム（以下、GH）にボランティアで宿直をするようにもなり、しだいにGHに関心を抱くようになりました。平成二〇年にNPO法人縁活（②）を立ち上げ、平成二一年にはGHすうほ（③）、平成二三年には作業所おもや（④）をスタート。現在は、作業所おもやでとれた野菜を使ったレストラン「おもやキッチン」の開店に向け、忙しい毎日をおられます。

人と関わるのが好きやから、G.Hを立ち上げたい

齋藤 では早速なんですが、杉田さんが今のお仕事に就かれるまでのこれまでをきかせてください。

杉田 短大を出て就職をしようとなつた時の話なんですけれども、何となく福祉の仕事がしたいなあと思つたんですね。何でと言われてもよくわからなくて（笑）。人と関わるのが好きやからということだと思うんですけど。

先生に相談して、あざみ寮もみじ寮を紹介してもらつたんです。何も知らへんまま見学に行かしてもらつて、話を聞かせてもらつたら、君、福祉の事をわかつてない、と（笑）。

齋藤 短大では、何を専攻されてたんですか？

杉田 国文科だったんですけど、福祉系でも何でもない。手話サークルとかはちょっと入つてたぐらいで、全然何も関係のないところからそういうところに行つてしまつて。『福祉の手引き』という（笑）本をもらつて、滋賀の福祉の事業所がいろいろ載つてるからということで、いろいろ見たんですけど、自分の地元栗東とか、草津とか。それで、僕も入所にどうしても行きたいと思つたんですね。人と一緒に、共に何かやりたいという思いがなんかあつて、作業所は全然思わへんくつて、がつづり働きたいというのがあつて。で、もみじあざみ寮を最終的に選んだんです。もみじあ

ざみ寮つて、入つてすぐにすごい大きい木があるんですよ。それを見た時に、豊かやなあ、僕、こういう所で仕事をしたいんだと思って、それで決めました。それで、僕はここで働きたいんですつてお願いしたら、現場はあいてないって言われて。でも、事務があいているからつて、あつ、僕、事務でいいですと言つて事務に入つたという、そういう成り行きがあつて。

大木会の事務がまた面白くつて、事務員やつたら基本現場入らへんし宿直もないんやけれど、あそこは事務員でも現場とか、男子職員は宿直に入らなかんとかあるんですね。事務員が宿直するとそこの寮生さんは喜ぶんですよ。入浴介助もして、朝ごはんも夕ごはんも一緒に食べて。事務員でありながら、現場に直で関わることが多かつたり、事務所の中にばんばん利用者さんが来て、杉ちゃん杉ちゃん、何にしてるの？なあなあ、今度さあ、遊びに行こうよ、とか、そういうようなやりとりをやらしてもらつてて。でも、ちょうどその時、措置から支援費に変わつたり、施設長も変わつたりしたんですよ。その時に、施設長が、杉田くんは現場向きだつて言わはつて（笑）、現場に来てくれへんかみたいになつて。僕も現場に行きたい思いがあつたんですけども、そんなん自分から手を上げてやるもんやないし、その時は、より事務の事を専門的にして頑

張つていこうかなという時やつて。それに、大木会の引つ越しにいろいろあつたので、落ち着いた後に現場の方に異動となつた時に、実際に現場に。

現場は勿論好きやし、人と関わるのが好きで、利用者と

関わつて余暇活動みたいな事もしながら、ケースを考えていくの大好きやつたので良かつたんですけど、自分には

何も専門性がないと思つたんです。それで、もう一回そこをちゃんと勉強しなあかんと思って、福祉の専門学校に通信で行つたんです。それと、仕事をしながら、ボランティアでGHの宿直のお手伝いもさしてもらう事になつて、

ケース会議にもちよつと呼んでもらつたりとか、そういう関わりもやらせてもらつていて、GHというのもすごく興味を持ち出して、自分でGHやりたいなという思いが出てきまして。だから、社会福祉士という資格を持つた方がいろいろな情報も勉強にもなるだろうというのと、職場の所の支援に関しても知りたいというのもあって、二つの目的で社会福祉士の資格を取りに行つたというのがあり

ますね。で、社会福祉士の資格を取つたのが二〇〇八年だつたと思うんですけど、そのままの流れでもう動いたれと思つて、法人を立ち上げて、GHを立ち上げる動きになつていつたんですけど。

齋藤 二〇〇八年に、縁活がスタートしたということなんですね。

杉田 設立総会を開いて、準備委員会を開いたんですかね。ほんで、準備に向けて動き出して、実際に動き出したのが二〇〇九年の一月だつたと思うんです。それで、そのまま三月からGHはスタートしましたね。

GHがスタートした時も、まだもみじあざみは辞めてなかつたんですね。もみじあざみで仕事しながらGHを立ち上げさせてもらつて、同時進行させてもらえたということはすごいありがたくて。僕は、GHの実際管理者とか事務の事はやつているけど、仕事はしてないというようにして、両方やつてたんです。

①もみじあざみ寮・・・滋賀県湖南市にある社会福祉法人大木会が運営する知的障害者施設。昭和四四年に開寮。

②NPO法人縁活・・・平成二〇年設立総会開催、平成二一年NPO法人として認証取得。現在は、GHすうほ、作業所おもや（就労継続支援B型事業所）を運営しております。

③GHすうほ・・・NPO法人縁活が運営するGH。平成二一年に開所。

④作業所おもや・・・NPO法人縁活が運営する就労継続支援B型事業所。平成二三年に開所。野菜の自然栽培・加工・販売などを行なつておられます。

大きな決断

杉田 でも、蓋を開けてみればあんだけGHが必要だとか言うときながら、最初は入所者一名だけやつたんです。しかも、その時は自分が入所施設で働いている感覚でやつてるので、来はつたらその人の全部を自分がやらなあかんと一生懸命になるんですよ。一生懸命一生懸命支援をしようというのが抱え込むことばかりになつてしまつたというのが、今思えば反省なんですけれど。ある出来事があつて、その時に相談支援事業所絡めてなかつたりとか、働き

暮らしさんはどういう動きをしてたのか、そこにちゃんと連絡をできてなかつたのではないか、とかいろいろあって。入所施設だつたら、このチームでこの人を三六五日サポートしますという気持ちやけれど、GHではそれは絶対無理な話で、そこらへんをその時すごく痛感して。俺たちはほんまに、すごいいいGHをつくろうと思うて立ち上げたのに、こういうことになつてもうあかんのじやないかといふぐらいに陥つて。

そういうふうになつて、あつ中途半端はあかんと思つて、もうこれはもみじ辞めなあかんわと思つて、二〇一〇年の三月いっぱいでもみじを辞めてGH一本になつたということなんですけれど。その時に嫁がね、もう俺、GHしつか

りやらへんとあかんと思う、もう、もみじあざみ辞めようと思うって言うたら、辞めたらええやんって（笑）。それを言つてくれた時に、あつ、これでもう僕も確かに生活は苦しくなるし目茶苦茶になるかもしけんけど、これで良かったと思つて。

齋藤 辞めたらええやんって、言うてくれはつたんですね。杉田 そうなんです。その分、時間も空くし子どもとも接点も出来るし、しかも、近くの職場やつたら行き来もすぐやし、いいんじやないって。

齋藤 子ども、いくつやつたんです？その時。

杉田 それがまた、面白いんです。二〇〇九年三月にGHがスタートしたじゃないですか。二〇〇九年の一月に子どもが生まれたんです。事業立ち上げ、子ども生まれも一緒なんです。共に歳取つてているんですよね。

GHへの思い「これやねん」

齋藤 どうして、GHやりたいなあつて思ははつたんです？

杉田 入所施設で働いていた時に、二五名のお風呂入れたり、お食事をみたり、寝えやあという声掛けとかしていたり、余暇の支援とかしてた時にも思つたんですけど、こ

れでええのかなあと思つたんですね。いもあらいまでいかへんけど、早く入浴を終わらす事が目的になつたり、早く歯を磨く事が目的になつたりとか、そういうふうになつた時に、ちょっと違うなあと思つて。でも、ボランティア先のGHに行つた時に、ほろいほろい家やつたんですね。すごい豊かやつたんですよ。仕事帰つて来て、直ぐにお茶とか牛乳とかぼいと飲んで洗い物して、お風呂入つて洗濯物自分で回して、ごはん食べてビール飲んでゆつくり過ごしはあるのを見て、いやこれじやあないのかなあと思つた。こんな素敵ないい暮らしないわと思つて、僕、これを栗東でやりたいというふうに思つて。それがきっかけですね。

僕、宿直が大好きで宿直入つてるんです（笑）。夜に行つて、仕事の愚痴の話を聞いたりとか、僕の話も聞くし聞いてくれるし、みんなでゲームしたりとか。お酒飲みながらゆっくり過ごす時間がいいんですね。で、寝ぼけながらトイレ行つて、俺のやりたかったのこれやねんつて（笑）。せやねん、これやねんなあつて（笑）、あーええわーと思つて。

僕は、あんまりそんなえらそうなことどうこう言うよりも、なんかこうそういうことをやりたいんです。その時に、なんか自分の中に落ちるんです。なんか対等対等つて言う

けど、ほんまに対等なのかなあつて言つたら、もう、対等じゃないと思うんですね。僕がスタッフであつたり、管理者とかになつてしまつて、利用者で来つてはる人が対等な訳ないと思うんですよ。でも、そのこと自分がわかつた上で、そこにちゃんと近づける努力をするかどうかやと思うし、そこでお酒という道具を使いながらね、そういうお互ひが裸になれるような会話が出来た時に、これやねんなあ、ほういうことがしたいねん、よかつたあと思つて。夜、共に語り合えたりとか、この前やつたら居酒屋へ行つて話をしたりとか、そういうことができるつていうのは、やっぱりいいなあと思うし。

齋藤 これやねんなあつて思う杉田さんの価値観を育んだ環境つて何だと思われます？

杉田 何なんですかねえ（笑）。ボランティアでGHの宿直をしてた時のことありますし、もみじあざみとかでも。昔つて、もみじあざみつて、毎月誕生会があつて、職員も寮生も一緒に祝つてもらうんですね。ほんで、絶対そこにお酒があつたりとか、一緒にごはんを食べる空間があつたり、冬やつたらお鍋があつて。暮らしというものが一体であつて。だから、指導者・支援員・利用者みたいではなくて、本当にもつと近い関係で、共にというの。

四六時中勤務なんてありえへんわつて、勿論そうかもし

れへんしありえへんと思うんやけど、その四六時中勤務ということだけじゃなくつて、もっと共に生きるところでそこやと思うんですね。割り切ることは大事やと思うけど、ほんまに割り切れるの？って思うんですよ。農業だつて割り切れないですもん、結局。自分が種植えたやつを、気になつたら毎日見るし、やっぱ毎日水あげるじやないですか。

手入れしてあげて大きくなつて、大きくなつたなあつて思うし、それが育つことやし、愛情やと思うし。それつて支援だつて一緒だと思うし、そうなつた時に、勤務外です、すいません、誰がみるの？誰もいません、それ知りませんみたいな、それ支援じやないやんと思うし、やっぱり、そういう気持ちみたいなものが、最後はやっぱ大事やしねつと思うし。

もみじあざみでも学んだことはそこやと思うし、だから僕、暮らしが大好きです。暮らしからスタートしているので、農業も結局、暮らしに近いんですよね。決まった時期に肥料あげて土寄せして、また追肥して、適当に剪定してというか、決まった教科書通りの選定を全部やつたら、全部思い通りのものが育つんかつて言つたら絶対育たないんですね。なんでかつて言つたら、一個一個みてないから。だから、結局全部一個一個みなあかんのですよね。だから、そういう対話型農業、自然栽培ともいうんですけど、それ

と、支援というものは一緒やと思うんです。だから、その時、僕の中では全部落ちたんです。だから、あーやりたい、自然栽培と思って。で、そういう支援をやつぱりしたいと思うんですね。

おもや、おもやキッチンの構想「ご縁を活かす」

杉田 GHを立ち上げた後、昼間に空き時間が出てきたんですね。それで、親父の畑を手伝うようになつたら、うまいことやればもしかしたら面白いことできるんちゃうかなあと思って。それで親父と相談して作業所立ち上げたい、農業をメインにして作業所やりたいと言つた時に、やつたらいいんじゃないのかという話になつて。あと、その時にいろんな方々のお手伝いがあつたり。それで、おもやをスタートさせたというのが二〇一一年なんですが、またおもしろい話で、その四月に双子の子どもが生まれたという（笑）。

齋藤 子どもの成長に合わせたかつたんですか？

杉田 いや、いや、関係ないでしょ。そんな（笑）人生つて思い通りにいかないですよね、いい意味でも悪い意味でも。おもや立ち上げてよつしやという時に、自分が自由とかへんみたいな（笑）。

おもやを立ち上げて、一年目の利用者は最終四名ぐらいで。二年目三年目でようやく事業の方も見えて来て、今度は売上という課題が出て来て。そこで、より専門的な、もつとこだわった野菜作りをしたいなあといふところで、無農薬無肥料っていうお話を聞いて、勉強しに行つたんですね。それで、いろいろお話をさせてもらつて、帰りの道で、全面自然栽培するつて（笑）決めて、それで今に至るんすけれど。

より専門的なより特価した、とがつたものを作つていこうと思つたら、最初はやっぱりリスクもかかります。収入を上げるために身につけて、で、障害者支援をしつかりしていこうというところで、次は、そこから、飲食事業の展開

ということで、おもやキッチンの話があるんですけれど。虫食いであつたり形の悪いお野菜というものの有効な使い方もそやし、あと、僕もそやし、みんな、働きに来ているみんなもそうなんですけれど、こだわつて野菜作つてんのに、みんな何でカツラーメン食つてんねんみたいな。なんかひもじいなあと思つて。せつかく、俺ら、ええ野菜作つてのになんやねんと思つて（笑）。作つている野菜、やっぱそれを使つてごはん食べたいなあと思つて。

それでおもやキッチン立ち上げて。僕らも食べたいし、

世の中のニーズにも沿つてんのじやないのかなあと思つて。僕だつて子どもおるし、子どもにごはん食べさせる時に、スーパーのお惣菜を毎日食べさせたいんかなあと思うし。あと、子ども生まれた時がちょうど三・一の頃やつたんですよね。そこから展開してると思つんですけど、時代も。やっぱり、食に対する不安とか、そういうものがある中で、もつともつと自然の中で育つようなお野菜、本来の味のあるお野菜を食べて、しかもそれがプロの手によつて作られたもので。なんだつたらカフェも出来るし。そういうスタイルがあつてもいいなあと思つて。

一個一個ほんまにええもんつくつていくとこから、その次にというような流れにうまいことなつていつたなどいうのは思うんですけど。

齋藤 なるほど。その一連の取り組みが支えられている環境というか、何に支えられているなあと感じるかという事と、こういうとこ困つたなあみたいなこととかはあるでしょうか。

杉田 みんなに支えられているのがあつて、うちの法人名が縁活なのもそれがそうで、ご縁があつてそれを活かせるから縁活、活かしていかなあかんと思うので、きつとそれが次の出会いになつたり、次のいろいろなことになつっていくと思うので。それは、利用者として来られる方との出会い

いも含めて、になりますね。

生まれ育つた土地、農業ということ

齋藤 杉田さん、お生まれば？あと、どう育ち、何を感じとか、今の実践につながっている思い出とかですね・・・

杉田 僕、生まれたのが昭和五二年で、今、三七歳になります。生まれも育ちも滋賀県の栗東なんです。兄弟が三人いまして、一上に姉がいて、私がいて二下に妹がいた

という感じで、は生まれていたんですね。

齋藤 僕もは生まれつ子。

杉田 そうなんですか。なんかねえ、は生まれて育つということは、窮屈でありながら、それを楽しめれる人間になれると思うんですよね。たぶん、どっち側にもつけるしどつ側にも思いが入れるような。

ほんとまあ、そうやつて長男でありながら真ん中という

ところで育つてきたというところがあつて、うちの父は兼業農家という形で畑とか田んぼをしながら仕事をしてまして。祖母ちゃんが、おまえがこの後継がなあかんねんぞといふことを、生きている間ずっと言われ続けて育つてきた。

農業を、この土地を守つていかなあかんとか、あんたがうまくならなあかんねんでとか（笑）、丁寧にしなあかんね

ん畠仕事はとか、いろいろそういうことをお祖母ちゃんから習つたりとか、そういうことも受けてたという。それで人と関わることが好き。農業も昔からちょいちょいやらせてもらつてたという。

山本 お祖母ちゃんから、この土地を守らなあかんねんみたいなことを教わられたということですが、そのことと今杉田さんがこの栗東という土地でされている様々な実践つて、どんなふうに杉田さんの中で繋がつておられるのかなあと・・・

杉田 守らなあかんという気はあんまないんですね。実は、この土地を守るというよりも、この町が好きなんですね。この町が、もつともつと繋がることができたらええなあと思ってて、だから、そういうところに持つていきたいなあと思うんですね。その繋がる為のものとして僕は福祉があると思うので、福祉というものを使っていろんなものと繋がりたいという思いがあります。

新しいものつて今どんどんあると思うんですよ。新しいもの作るのも大事、立てたりするのも大事やけど、むしろ、今あるものをどう繋げていくか、そして、面白いことが出来ればええなあと思ってて。

別に町興しする目的に、おもやキッチンする訳じやないけど、結果そういうふうになると思うんですね。そうなつ

た時に、この町全体の中の一つの繋がりが拠点として出来るつて。それが出来たら、次また面白い展開を、若者たちが次ここでなんか住みたいと思えるような、とかになると思うんですよ。

福祉って、水のようなもんだと思うんですよ

齋藤 杉田さんから見て、今後の福祉ってどう歩んでいくべきというか、どうあるべきだと思われます？

杉田 そうですね。なんでしょうね。どうあるべきなんでしょうね。福祉ってこうだつていうもんじゃないとと思うので、すべてのものに繋がるようなものやと思うし、例えるなら水のようなものやと思うんですよ。何にでもなるし、それはすごく必要なものやと思うんですよ、いろんな分野に関しても。だから、そうなつてほしいって思いますね。

齋藤 福祉であるからこそ何か、何でも出来るというか、何にでも繋がれるというか。

杉田 障害を持つてはる方々を分けることによつて、歪みが生まれているのが今やと思うんですよね。そういうものが上手に回つていく社会がつくれると思うんです。やっぱ、一緒に仕事してて燃えますしね、彼らがいるから僕ら

スタッフ間のコミュニケーションが潤滑になつたりとか、彼らがいるから空間が常にハッピーでいられると思うんですね。天使やなあ、お前ら、とも思うし、時にはなんでもねんと思うことも勿論あるんですけど、それが生きることということを楽しくさせることやと思うんですよ、充実させることというか。それで、果たして、障害だという区分けをすることによつて、そういう彼らがいなくなつて、それでみんながハッピーになるのかつて言つたらそういうじゃないというのはわかつてきた話なので、いかに社会と繋がつてそういう彼らの役割をつくつていくのかつていうのが僕らだと思うので。福祉というものは、いろいろなものに適応していくような水やと思うので、僕らはそこに繋げていきたいと思うんです。

齋藤 今日は、貴重なお話をきかせていただいて、ありがとうございました。